



貝原守一医学振興財団会報

第10号



foundation juridial person MEDICAL SCIENCE KAIBARA MORIKAZU PROMOTION FOUNDATION

貝原守一医学振興財団
会報 第10号

目 次

- ・巻 頭 言 p 1
橋場 邦武 (理事 長崎大学名誉教授)
- ・会報の発行について p 2
佐伯 清美 (理事長)
- ・第10回 研究助成金贈呈式記念写真 p 3
- ・平成14年度助成選考過程について p 4
橋場 邦武 (理事 長崎大学名誉教授)
- ・平成14年度研究助成金授与式 p 5
佐伯 仁子 (専務理事)
- ・平成15年度助成選考過程について p 6
橋場 邦武 (理事 長崎大学名誉教授)
- ・平成15年度助成受賞者 p 7
牟田 達史 (九州大学大学院医学研究院)
- ・平成16年度助成選考過程について p 8
橋場 邦武 (選考委員・理事 長崎大学名誉教授)
- ・「研究を大事に育ててください」 p 10
天児 和暢 (選考委員・理事 九州大学名誉教授)
- ・「研究助成選考にあたって」 p 11
小野 順子 (選考委員 福岡大学医学部教授)
- ・平成16年度助成受賞者 p 12
吾郷 哲朗 (九州大学大学院医学研究院)
諸隈 誠一 (九州大学大学院医学研究院)
外角 直樹 (久留米大学医学部)
- ・平成14年～16年度 青藍会 貝原守一賞受賞者 p 15
- ・平成13年～16年度 宮崎一郎奨励賞受賞者 p 16
- ・財団の主な事業報告 (平成13, 14, 15, 16年度分) p 18
- ・貝原守一の遺稿より (その10) p 22

「貝原守一医学振興財団の新しい発展に向けて」

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

「貝原守一医学振興財団会報」第9号は、創立十周年記念号として、平成13年に発行され、今回の第10号はそれに続くものである。「記念号」には、本財団から研究助成を受けられた計57名の研究者のお名前とそれぞれ受賞対象となった研究課題の一覧と、受賞後の研究成果として学術雑誌に発表報告された関連論文の別冊の目録も掲載されている。本財団の最大の目的である研究助成事業の成果を示すもので、本財団の貴重な財産と実感されるが、これらの研究者の中には、受賞後に、指導者として教授などに御栄転になられた方々もおられ、喜ばしいことと感じる次第である。

筆者の個人的感想としては、十周年を一つの道標として、本財団の活動が第二期ともいふべき新しい時代に入ったと感じている。というより、これまで財団の研究助成選考などに関わらせて頂いた者として、より一層の新鮮な心構えで今後に臨みたいと考える次第である。

21世紀に入って既に数年を経過したが、この比較的短い期間において、あらゆる分野に大きな変動が生まれている。大学などの研究機関においても、急速な変化はまことに顕著なものがあり、国立大学の独立行政法人化だけではなく、臨床研修医制度の抜本的ともいえる大きな変革によって、すべての医学研究機関の研究体制も新しい構築を迫られている。何事にもスピードと能率が求められ、また、一方では、いわゆる *evidence-based medicine* と称される大量化医療の傾向の中であって、若い医師たち、研究者たちの間には、ある種の戸惑いや不安の中にも、新しい志向や意欲も生まれ育って行くことであろう。

本財団の研究助成に対する応募者にも受賞者にも、最近では、理学部、薬学部、農学部などの医学部以外の出身者が稀ではなくなって来た。これは、世界的な傾向でもあり、国際的に通用する研究の土壌が、広く、また、深く求められて行く時代の趨勢を示しているものかとも思われる。

ともあれ、貝原守一先生の御名前を冠するこの医学振興財団が、あくまでも医学研究振興の大道を発展し続けることを願うものである。

「会報の発行について」

理事長 佐伯 清美

会報の発行は、平成13年に創立10周年記念誌を出して3年ぶりである。

平成14、15年の2年は、運営資金の不足で、助成論文の募集を中止したため会報の発行も中止した。

平成14、15年の2年は論文募集の代わりに、平成4年初回の論文募集より9回までに研究助成を行った優秀論文(57編)のうち、とくに秀でた論文を選考してもらい、14年度は1名、15年度は2名の方々に研究助成金を授与した。

平成16年は、小額ながら運営資金ができたので、論文募集が3年ぶりにでき、3名の方々に研究助成金を授与することができた。

現在の厳しい日本の経済状態のなかで、ほそぼそながら研究助成ができるのは、財団理事の熱心な協力のお陰であり、感謝申し上げたい。

優れた医学の研究に助成金を出して、研究の成果が上がり、医学の発展に寄与することが財団の主目的であるが、現在に日本の経済政策のなかでは、基本財産の維持すら易しいことではない。日本の政治経済が一日も早く正常になり安定した状態になってくれる日が訪れる事を祈っている。



平成 15 年 2 月 28 日（福岡ガーデンパレス）

第 10 回 貝原守一医学振興財団研究助成金贈呈式

財団理事長は、贈呈者の意向が、病状の悪化を抑制し、患者の生活の質を向上させることに向け、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。
 贈呈者側は、贈呈された研究助成金の活用が、研究の推進に資することを期待し、
 財団の事業に活用されることを願うとの挨拶を述べられました。

平成 14 年度助成選考過程について

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

貝原守一医学振興財団の平成 14 年度の事業として、2 名の研究助成を行うとの方針が決定され、その選考について理事長よりご依頼を頂いた。そこで、1) これまでの受賞者で、研究報告論文の掲載学術誌の別冊を貝原財団に送付されている方々を対象とする。さらに、2) 論文の内容と構成が十分に学術的であること。3) 当該論文の掲載誌が国際的に評価されているものであること。4) その論文が他の欧文学術誌の掲載論文中に参考論文として引用されていること。5) 現在も福岡県内にて研究活動がなされていること。などを選考基準とすることとし、これについて理事長の賛同を得た。

平成 5 年から 12 年度までの受賞者から財団に送付され別冊がこれまでに 19 編あるが、これらの論文の他の欧文学術誌による引用件数は、一論文当たり平均 13.4 件とかなり高く、過去の本財団研究助成受賞者の水準を示すものであり、これまで選考に当たった委員の一人として喜ばしく感じた。

選考の詳細は省略させて頂くが、上記の 2)、3)、4) の諸点について、可能な限り数量的評価も加えて選考した結果を理事長に報告し、最終的に次の 2 名の方が受賞者として決定された。

1. 藤 也寸志 国立病院九州がんセンター
(前回受賞時 九州大学医学部腫瘍センター)
2. 田中 良哉 産業医科大学第一内科

候補者として検討した方の中には他大学の教授などとして、福岡県から転出されたかたもあり、今回の受賞対象にはならなかったが、本財団研究助成受賞者の活躍を示すものとして、付記しておきたい。

なお、今回のような形式の研究助成は例外的なこととも思われるが、それを別としても、前回までの受賞者および今後の受賞者を含めて、研究助成に関連する研究論文については、論文末尾に本財団の研究助成を受けたことを付記することと、別冊を財団宛に送付することを是非ともお願いしたい。これは本財団の最も重要な事業である学術研究助成の実績を具体的に示す記録となるからである。

別冊論文の他の学術雑誌への引用回数、*impact factor* などのコンピューター検索については、本財団、貝原宗重理事の助力を得た。記して厚く謝意を表す。

平成 14 年度（第 10 回）の研究助成授与式は、平成 15 年 2 月 28 日（土）、例年と同じ福岡市中央区の、ガーデンパレスホテルで行われました。参加者は、贈呈者 1 名（1 名は欠席）、財団関係者 9 名の計 10 名でした。

今回は、記念すべき 10 回目の贈呈式でしたが、財源が乏しいため、例年のように論文公募はなさず、過去 9 回の贈呈者のうち、完成した研究論文の別刷を財団に届けて頂いた 21 名の中から選考がなされ、2 名の方に贈呈されました。

選考は、理事で長崎大学名誉教授橋場邦武先生が担当され、決定しましたのは下記 2 名の方々です。

・藤 也寸志（平成 7 年度贈呈） 国立病院九州がんセンター
（前回受賞時 九州大学医学部腫瘍センター）

・田中 良哉（平成 6 年度贈呈） 産業医科大学第一内科

田中良哉先生は学会出張中のため欠席で、藤也寸志先生のみ出席でした。

式は、理事長の挨拶で始まり。助成金を贈呈の後、橋場先生より選考についての説明があり、結城操理事の祝辞で終わりました。

選考に当られた橋場先生のご説明では、2 名の贈呈者の論文は、世界各国の研究者に数多く引用されている優れた研究であるとのことでした。また、過去の贈呈者の中より、数名の方が大学教授に就任しておられ、過去の論文選考が実に素晴らしいものであったと理解できるとお話になられました。

結城操理事は、贈呈者の研究が立派に実を結び、医学の進展に役立ち、人類の福祉に一層貢献される事を願うとの祝辞を述べられました。

式終了の後、一同で記念撮影をし、祝宴に入りました。

柳原弘毅理事の音頭で乾杯の後、贈呈者、藤也寸志先生より、授賞の研究内容についての説明がありました。先生の研究は、癌（がん）転移のメカニズムを追究するもので、先生が発見された「MTA I」について、現在も研究を続けている由で、人間の病気のうち最も恐ろしい「がん」の撲滅のため、研究の一層の成果を願いました。

祝宴は、和気藹々のうちに約一時間で終了いたしました。

財団の最重要な行事を、国の経済事情の最悪な財政困難の中にも行う事が出来たことは、私たちにとってこの上ない喜びでした。

塚田武司顧問の閉会の挨拶で、午後 8 時無事終了いたしました。

厳しい財政情勢のなか、関係者一同が一層の努力をし、財団の発展のため力をあわせねばと心に誓ったことでした。

貝原守一医学振興財団の平成 15 年度の事業として 1 名の研究助成を行うとの方針が決定され、その選考について理事長よりご依頼を頂いた。そこで、平成 14 年度の場合と同様に、1) これまでの受賞者で研究報告論文の掲載学術誌の別冊を貝原財団に送付されている過去の受賞者を対象とする。2) 論文の内容と構成が十分に学術的であること。3) 当該論文の掲載誌が国際的に評価されているものであること。4) その論文が他の欧文学術誌の掲載論文中に参考論文として引用されていること。5) 現在も福岡県内にて研究活動がなされていること、などを選考基準とすることとし。これについて理事長の賛同を得た。

貝原財団では、従来は公募を行い、応募者の中から優れた研究者に研究助成を行ってきたが、最近の経済情勢のために財団の経理上の理由により、平成 13 年度は授賞を中止し、平成 14 年度には公募によらず、上述の方法によって 2 名の受賞者を決定した。今回もその方式によって 1 名の選考を行った。ただし、公募が行われたのは平成 12 年度までであるので、選考基準となるその後の研究業績の評価に関しては、受賞者によって 2001 年から 2003 年 10 月までに発表された論文を対象とすることとした。その結果、九州大学細胞生化学講座助教授 牟田達史先生を第一位に決定し、他に 2 名の先生を補欠の参考として理事長に報告し、理事長により、牟田先生に決定された。

牟田先生は、平成 12 年度（応募による最後の年度）に授賞されたが、2001 年から 2003 年 10 月までの期間に、筆頭者または第二筆頭者として、6 編の高い水準の国際学術誌への論文掲載があり、内、平成 12 年度の研究応募課題に直接的に関連したものと判断される 3 編の論文には、貝原財団による研究助成への謝辞が述べられており、研究者としての姿勢にも折り目の正しさが感じられた。

牟田達史先生は、九州大学大学院医学研究院分子細胞生化学分野 助教授（竹重公一朗教授）で、平成 12 年度授賞時の研究テーマは、自然免疫による単球・マクロファージによる微生物認識・応答機構であり、自然免疫による病原菌認識・応答機構の解明を目的としたもので、非常に基礎的であるとともに、視野の広い領域で、今後の発展が期待される研究に従事である。

今後の選考に当たっても、過去の本財団研究助成受賞者水準の高いことが種々の点で確認され、これまで選考に当たった委員の一人として喜ばしく感じた次第である。

以上が平成 15 年度貝原守一医学振興財団の研究助成受賞者の選考過程であるが、今回の選考に当たって受賞者の論文のコンピューター検索などについては、本財団貝原宗重理事の助力を得た。記して厚く謝意を表する。

「自然免疫における単球・マクロファージによる微生物認識・応答機構」

九州大学大学院医学研究院分子細胞生化学分野

牟田 達史

高度な免疫系である獲得/適応免疫をもつ哺乳動物でも、感染微生物を最初に認識、応答し、その後の生体防御反応の発動を制御するのは、単球・マクロファージなどの自然免疫担当細胞である。

自然免疫では、グラム陰性菌のリポ多糖 (LPS) などの、自己にはなく微生物表層に存在する特徴的な抗原に応答する。近年、こうした分子に対する細胞応答は、Toll-like receptor (TLR) という膜タンパク質を介して行われていることが明らかになった。一方、微生物成分による TLR 活性化の分子機構は未だほとんど不明である。本研究では、我々が構築した TLR 遺伝子導入細胞を用いた自然免疫活性化の再構成系を活用しつつ、微生物の認識、応答とその制御の分子機構を明らかにすることにより、多細胞生物の微生物認識機構、さらに生体防御機構の全体像を解明することを目的とする。また、本研究の推進は、現代社会でもなお、医学が克服すべき課題の一つである微生物感染による敗血症等の全身性炎症反応の予防と治療法の開発、あるいは自然免疫系の細胞応答反応を活用した種々の新しい免疫療法の開発につながるものと考える。

平成 16 年度助成選考過程について

財団理事 長崎大学名誉教授 橋場 邦武

平成 16 年度の貝原守一医学振興財団の研究助成に対しては計 10 件の応募があり、平成 17 年 1 月 22 日に天児和暢（九州大学名誉教授）、小野順子（福岡大学教授）、橋場邦武（長崎大学名誉教授）の 3 名の選考委員による選考を行い、3 名の受賞者が決定された。佐伯清美財団理事長も同席され、同理事長の御指名により橋場が委員長を務め議事を進行した。

今回は 4 年ぶりの公募選考となった。本財団の研究助成は公募選考を当初からの方針としている。しかし、極端に窮屈な最近の金利政策の影響を受けて助成継続に困難を生じ、平成 14 年度、15 年度には、次善の方策として、公募は行わずに、過去の受賞者の中から、その後の研究活動を国際学術誌への投稿論文などから評価して、1~2 名の受賞者を財団が選考氏名して研究助成を行った。このようなやや変則的な研究助成の期間があったためかもと考えられるが、以前には 4~6 件の研究助成に対して毎回 20~30 名以上もあった応募者数の盛況に比べると、今回の応募が 10 名に止まったことはいささか淋しさを感じさせるものであったが、応募研究の水準は従来と同様に非常に高いものが多く、今後の再発展への方向として、大いに意を強くさせられるものがあつた。

実際の選考方法としては、第一段階として、3 名の選考委員がそれぞれ独自に応募者の研究課題、研究目的、研究方法、添付別冊、などの応募書類を検討し、また、これまでの研究歴、研究実績、発表論文の数とその内容、論文掲載雑誌の国際的評価、などを総合して、応募研究の独創性、将来性、実現性などについての評価を行った。

第二段階として、選考委員会を上記の日時に開催した。3 委員が各自の評価結果を持ち寄り、それぞれ公表し合った上で、1 課題ごとに意見を交換した。3 名の委員の第一段階の評価がすべて一致をみるとは限らない点もあつたので、十分に時間を費やして議論を尽くすように努力し、最終的には 3 名の受賞者を全く異論なしに決定することができた。いずれの研究課題も高く評価され、また、これまでの研究実績から考えても、今後の研究成果が大いに期待される研究者と評価された。なお、研究分野、所属機関などの相違に関しては全く配慮を行わなかつた。

受賞者と決定したのは、九州大学 諸隈誠一、九州大学 吾郷哲朗、久留米大学 外角直樹の 3 名であるが、この委員会の決定はそのまま佐伯理事長によって受理された。本財団の最も重要な事業である将来性豊かな若い研究者への研究助成が、応募者の中からの選考という本来の方針で決定されたことは、まこと

に喜ばしいことと感じている。

なお、3名の受賞者以外の応募者にも立派な研究者が多かったことも特に付記しておきたい。委員会としてあえて次点と評価した他の2、3の応募者を含めて、10名という比較的少数の中には優秀な研究者も多く、今後の研究の御発展を期待したい。また上述のように、選考に当っては、研究分野、研究方法などによる選別は全く行われていないので、今後の機会に応募を希望される方々、あるいは御推薦して下さる方々にも、この点についても十分な御理解を頂きたい。次回以後も引続いて優れた応募のあることを願う次第である。

なお、本財団の研究助成の受賞者が、助成課題に関連した論文を発表される場合には、本財団の研究助成を受けられたことを論文後記に明記することと、その別冊を財団宛に御送付下さることを、お願いしている。本財団会報第9号、財団創立十周年記念号には1995年から2001年にかけて受賞者によって発表されて、財団に送付された21編の別冊目録の一覧が掲載されている。これは本財団の研究助成事業の重要な記録として保存されるもので、財団の貴重な財産でもあることを御理解頂き、今回の受賞者にも、このことを特にお願いしておきたいと思う。

今回も立派な研究助成者を選考することができて、委員の一人としてまことに喜ばしく感じている。助成をうけられた研究者が優れた成果を挙げてそれを発表されることは本財団の事業の客観的評価と今後の発展のための最も大きな原動力である。各受賞者の一層の御活躍を期待し、選考過程の御報告としたい。

「研究を大事に育ててください」

選考委員・財団理事 九州大学名誉教授 天児 和暢

研究は、研究者自身の努力で育てていくものだと思います。始めたばかりの研究は、これからどう発展していくのか、多分研究者自身にも先のことは分からないでしょう。まして審査する方は全く判断のしようがありません。

細菌学の先駆者であるロバート・コッホは、あの有名な炭疽菌の研究をしたときには、無名の地方保険所の医者でした。当然のことながら、研究する場所も、研究費の補助もありません。自分の家で、奥さんを助手に、研究の費用はすべて自費で行ったのです。動物が必要になれば、庭にネズミの罠を仕掛け、それを育てて使ったと言われています。大変な努力であったろうと思います。しかし、この研究が有名になると、多くの研究費を得、研究所さえ設立されるようになりました。そして、細菌学の創設者としての地位を不動のものとしたのです。

天才とは99%の努力と、1%のひらめきだとあのエジソンが言っています。ゲーテも、モーツァルトの音楽を聴き、天才とは努力しうる才であるという結論に達しているようです。研究者の努力こそ好い研究を育てるのです。よい研究は、それだけ多くの努力がすぎ込まれた結果だと思います。

「研究助成選考にあたって」

選考委員 福岡大学臨床検査医学教授 小野 順子

今回初めての選考委員を務め、10名の方の応募書類を拝見いたしました。

30歳代の方々が、それぞれに先進的な手法を駆使して研究をしておられることに、感銘を受けました。また、海外の研究者と自由に共同研究をなさったり、試薬や実験動物の入手などを積極的に行っているなど、研究者としては当然の事ではありますが、規模やレベルが大変グローバルでありました。応募して頂いた施設の未来を想像して、明るい気持ちになりました。

研究手法が高度になるにつれ、研究費も高額となりますので、助成を生かして更に発展をしていただけると嬉しく存じた事でした。

授与が決定された3名の中、2名の方が既に留学の途についておられました。研究にも慎重な実験と同時に、鋭い勘も必要です。異なった研究環境で経験を積んで、御自分の出された結果をいろいろな角度から解釈出来るように、飛躍されることを祈っています。

助成の対象とならなかったご研究にも、多くの努力が見られております。

今後の成果をお聞かせ頂く機会があることを願っております。

「動脈硬化発症における活性酸素産生酵素 NAD(P)H oxidase の役割の解明」

九州大学大学院医学研究院病態機能内科学

吾郷 哲朗

活性酸素産生酵素 NAD(P)H オキシダーゼは、殺菌に特異的な複合体酵素として長く知られてきた。しかしながら、NAD(P)H オキシダーゼの主要コンポーネントである gp91phox (=Nox2) に、7 つのホモログタンパク質 (Nox1~Nox5, Duox1, 2) が存在することが明らかとなり、NAD(P)H オキシダーゼが、様々な細胞において活性酸素の産生源として作用していることが明らかとなってきた。特に循環器系分野では、高血圧や動脈硬化発症における活性酸素種の役割が重要視されており、その産生源として NAD(P)H オキシダーゼが注目されている。我々も血管内皮細胞に存在する NAD(P)H オキシダーゼの主要コンポーネントが Nox4 であることを報告している。しかしながら、これらの Nox タンパク質の発現制御や活性化機構について未だ不明な点が多い。本研究では、高血圧・動脈硬化の発症に寄与する Nox タンパク質を同定し、その発現制御機構を詳細に検討することを目的としている。我々は、Nox1 および Nox4 心血管特異的ノックアウトおよびトランスジェニックマウスを海外ラボとの共同研究によって作製し、心血管疾患発症における Nox タンパク質の役割を個体レベルで解析する。さらに、有意な表現型を示した遺伝子改変動物に関しては、血管内皮・平滑筋細胞の単離培養を行い、細胞内レドックス変化に伴うシグナル伝達の変化やそれを担うタンパク質の同定を行っていく。このように、個体・細胞レベルの両面から、NAD(P)H オキシダーゼの心血管病発症における役割について詳細な検討を行う予定である。

「ヒト胎児における学習と記憶の発達および胎児・母体因子が及ぼす影響に関する研究」

九州大学大学院医学研究院生殖病態生理学

諸隈 誠一

動物行動学者：ローレンツの唱えた行動科学の視点から、ヒト胎児の行動は中枢神経機能の表現型であるとみなすことができる。申請者らは、胎児の動作の観察により中枢神経系機能異常を出生前に診断可能な症例が存在することを示した。しかしながら、これまで用いた診断法では脳幹部よりも上位の中枢の機能を推察することは困難であることがわかった (K Fukushima, S Morokuma 2004)。

学習とは、環境に適応するために個人の行動が経験を通して変化することを言い、ヒトを含めた生物にとって不可欠な能力である。学習の一種である馴化とは刺激への反応が次第に減弱していく現象である。この現象は脳幹部よりも上位の中枢神経系機能を必要とすることが言われており、上位中枢機能を評価する指標となる可能性を有している。申請者らはこれまで、ヒト胎児の馴化について振動刺激を用いて検討をおこなった (S Morokuma K Fukushima 2004)。この検討において反応のばらつきが認められたため、本研究では多様な刺激を作成可能な音刺激を用いることとし、未知の刺激に対する注意反応である定位反応を誘発することとした。現在までに音刺激を使って妊娠末期の胎児に心拍数3から5bpm低下するという定位反応を誘発することが可能となっている。正常胎児における妊娠週数の変化に伴う変化を検討し、この結果を用いて胎児の進行性中枢神経系疾患（水頭症など）あるいは妊娠中の母体ストレスの学習能への影響を検討する。

「ドーパミン神経の機能制御によるコンドロイチン硫酸プロテオグリカンの役割」

久留米大学医学部薬理学講座

外角 直樹

中枢神経系においてコンドロイチン硫酸プロテオグリカン (CSPG) は、神経細胞の接着や遊走、神経突起の形成、シナプス可塑性、神経保護や再生に関与しており、脳の構造や機能を決定する重要な分子群の一つである。しかしながら、生物活性を示す正確な糖鎖配列は決定されていない。これは、CSPG の分量が極微量であり、生物学的機能を解析するのに十分な量を得ることができないなどが原因である。以上のようなことから、糖鎖の機能を正確に知り、その機能を応用するためには、複雑な構造の糖質の繋がった糖鎖やその誘導体を人工的に合成し、その性質や生物学的機能を評価することが必要であると考えられる。

我々は、糖鎖長や硫酸化パターンの異なる CSPG ライブラリー分子を作製することに成功した。本研究は、このライブラリー分子を生化学や神経生物学の研究に応用することにより、ドーパミン作動性神経細胞の分化・発達・再生を制御する CSPG の活性基本構造を決定し、その構造分子により惹起される神経細胞内の分子機構 (情報伝達機構) を明らかにすることを目指している。

「青藍会 貝原守一賞」(九州大学大学院医学研究院細菌学分野 同門会)

については下記のごとく決定いたしました

平成 14 年度

- ・ 斎藤 光正先生 九州大学大学院医学研究院細菌学分野

「H₂O₂-nonproducing *Streptococcus pyogenes* strains: survival in stationary phase and virulence in chronic granulomatous disease. /Microbiology 147 : 2469-2477, 2001」

平成 15 年度

- ・ 石川 崇彦先生 福岡大学第一内科

「The iron-binding protein Dps confers hydrogen peroxide stress resistance to *Campylobacter jejuni*. /Journal of Bacteriology 185(3) : 1010-1017,2003」

平成 16 年度 (3 名)

- ・ 大西 裕子先生 九州大学大学院医学研究院細菌学分野

「*Legionella dumoffii* DjlA, a member of the DnaJ family, is required for intracellular growth. / Infect. Immun. 72 : 3592-3603,2004」

L.dumoffii はレジオネラ属の中では 4 番目に肺炎をおこす頻度が高い細菌で、熱ショックタンパクの一つである DjlA が本菌の細胞内増殖に必須であることを明らかにした論文です。

- ・ 石 政維先生 九州大学大学院医学研究院細菌学分野

「Hydrogen peroxide production in *Streptococcus pyogenes* : involvement of lactate oxidase and coupling with aerobic utilization of lactate.

J. Bacteriol. 186(7)2046-2051,2004」

化膿レンサ球菌は、グルコースを使い果たすと、グルコース代謝の産物として一度菌体外に出した乳酸をまた取り込んで、lactate oxidase でピルビン酸に酸化すること、その時酸素を使って過酸化水素をつくること、ピルビン酸からは酢酸がつけられ、そのとき ATP が作られること明らかにしました。

- ・ 宮本 比呂志先生 産業医科大学微生物

「Virulence conversion of *Legionella pneumophila* by conjugal transfer of chromosomal DNA. /J. Bacteriol. 185(22),6712-6718,2003」

L.pneumophila が接合によって染色体DNAを他の菌体へ移すことができることを世界で初めて明らかにしました。

「宮崎一郎奨励賞」(九州大学医学部寄生虫学教室に設置)

については下記のごとく決定いたしました

宮崎一郎奨励賞

福岡利英殿

九州大学医学部 寄生虫学講座・教授
久留米大学医学部
寄生虫学講座・教授

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
同門会は貴殿の「ブルース
トリバノソーマの表面分子構造
の研究」を第七回宮崎一郎
奨励賞に選びました

茲に貴殿のご功績をたたえ、
賞状ならびに副賞として金一封
を贈呈し、表彰いたします

平成十三年十一月三日

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
会長 菊池正

宮崎一郎奨励賞

肥後廣夫殿

九州大学医学部
寄生虫学講座・講師

九州大学医学部寄生虫学講座
同門会は貴殿のクルーズトリバノ
ソーマの系統学的研究を第八回
宮崎一郎奨励賞に選びました

茲に貴殿のご功績をたたえ
賞状ならびに副賞として金一封
を贈呈し表彰いたします

平成十四年十一月二十四日

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
会長 菊池正

宮崎一郎奨励賞

濱野真二郎 殿

九州大学大学院医学研究院
寄生虫学講座、助教

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
は貴殿の「マラリアとロサラセミア」
その疫学的考察」を第九回宮崎一郎
奨励賞に選びました。茲に貴殿のご
功績をたたえ賞状並びに副賞として
金一封を贈呈し表彰いたします。

平成十五年十一月二十二日

九州大学医学部寄生虫学講座同門会

会長 菊池 正

宮崎一郎奨励賞

久枝 一 殿

九州大学大学院医学研究院
感染免疫・細菌医学分野、助教

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
は貴殿の「マラリア感染における免
疫制御性T細胞」を第十回宮崎一郎
奨励賞に選びました。茲に貴殿のご
功績をたたえ賞状並びに副賞として
金一封を贈呈し表彰いたします。

平成十六年十二月十一日

九州大学医学部寄生虫学講座同門会

会長 菊池 正

宮崎一郎奨励賞

段 学鋒 殿

九州大学大学院医学研究院
感染免疫・細菌医学分野、大学院生

九州大学医学部寄生虫学講座同門会
は貴殿の「マウスマラリアに対する
遺伝子ワクチンの開発研究」を第十
回宮崎一郎奨励賞に選びました。
茲に貴殿のご功績をたたえ賞状並びに
副賞として金一封を贈呈し表彰いた
します。

平成十六年十二月十一日

九州大学医学部寄生虫学講座同門会

会長 菊池 正

財団の主な事業報告

平成13年度 — 平成13年4月～平成14年3月 —

1. 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|---------|----------------------------------|
| 平成13年6月30日 | 朝日ビル会議室 | ・平成13年度事業計画並びに収支予算案の承認の件 ・その他 |

2. 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|---------|---|
| 平成13年6月30日 | 朝日ビル会議室 | ・平成12年度事業報告の件 ・平成12年度収支報告承認の件 (監査報告) ・平成13年度事業計画案承認の件 ・平成13年度収支予算案承認の件 ・その他の事項について |

3. 助成事業

| 年月日 | 行事 |
|-------------|------------------------------------|
| 平成13年10月12日 | 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室 賞金10万円を贈呈 |

平成14年度 — 平成14年4月～平成15年3月 —

1. 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|-------------|--|
| 平成14年6月29日 | 福岡センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成14年度事業計画並びに収支予算案の承認の件 ・その他 |

2. 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|-------------|--|
| 平成14年6月29日 | 福岡センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成13年度事業報告の件 ・平成13年度収支報告承認の件 (監査報告) ・平成14年度事業計画案承認の件 ・平成14年度収支予算案承認の件 ・その他の事項について |

3. 助成事業

| 年月日 | 行事 |
|------------|---|
| 平成14年10月2日 | 貝原守一賞 青藍会 九州大学医学部細菌学教室 賞金20万円を贈呈 |
| 平成14年10月3日 | 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室 賞金10万円を贈呈 |
| 平成15年3月1日 | 平成14年度研究助成金授与式開催(於)福岡ガーデンパレス 産業医科大学 1名 国立がんセンター1名 一件50万円 計100万円を贈呈 |

平成15年度 — 平成15年4月～平成16年3月 —

1. 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|-------------|--|
| 平成15年6月28日 | 博多センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成15年度事業計画並びに収支予算案の承認の件 ・その他 |

2. 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議案 |
|------------|-------------|--|
| 平成15年6月28日 | 博多センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成14年度事業報告の件 ・平成14年度収支報告承認の件 (監査報告) ・平成15年度事業計画案承認の件 ・平成15年度収支予算案承認の件 ・その他の事項について |

3. 助成事業

| 年月日 | 行事 |
|------------|--|
| 平成15年10月2日 | 貝原守一賞 青藍会 九州大学医学部細菌学教室 賞金20万円を贈呈 |
| 平成15年10月2日 | 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室 賞金10万円を贈呈 |
| 平成16年3月6日 | 平成15年度研究助成金授与式開催 (於)福岡ガーデンパレス 九州大学 一名 一件50万円 を贈呈 |

平成16年度 — 平成16年4月～平成17年3月 —

1. 評議員会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議 案 |
|------------|-------------|--|
| 平成16年6月25日 | 博多センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成16年度事業計画並びに収支予算案の承認の件 ・その他 |

2. 理事会

| 開催年月日 | 開催場所 | 議 案 |
|------------|-------------|--|
| 平成16年6月25日 | 博多センタービル会議室 | <ul style="list-style-type: none"> ・平成15年度事業報告の件 ・平成15年度収支報告承認の件 (監査報告) ・平成16年度事業計画案承認の件 ・平成16年度収支予算案承認の件 ・その他の事項について |

3. 助成事業

| 年 月 日 | 行 事 |
|------------|--------------------------------------|
| 平成16年10月6日 | 貝原守一賞 青藍会 九州大学医学部細菌学教室 賞金30万円を贈呈 |
| 平成16年10月6日 | 宮崎一郎奨励賞 九州大学医学部寄生虫学教室 賞金20万円を贈呈 |
| 平成17年1月22日 | 助成金授与論文選考委員会 (於)福岡ガーデンパレス 授与者3名選考 |



昭和17年 (1942) 31歳

デング熱 — 天狗か Denguer か — (一)

貝原 守一

長崎の流行以来、しやれか本気か、天狗熱などと新聞にかかれ人々の話題をにぎわしたデング熱も冬が近づくとともに全く影をひそめてしまったが、この研究は着々と内地の各研究所で進捗していることと思ふ。

デング熱は支那では古くから斑瘧などと言はれていたが、現在ではどの國でも、一、三の別名はあるが、広くデング熱と呼ばれている。デング Dengue とはスペイン語の Denguer すなはち『だて者』の意味で、この病気にかかるにあちこちの關節が非常に痛み、しやちこぼってすました様に歩くので、この名がつけられたと言はれている。しかしデング熱の意味は、このほかインド語の Dangue (打) で急に高い熱が出て発病する意味だと言はれている。又マレー語の Dengu (あほう) も何か関係があるかもしれない。

この病気はおそらく、わがマレー、ジャワ、スマトラなどには、古くからあったのだが、ながい間黄熱と間違えられてきている。ラングーン地方では毎年四月から九月にかけて必ず流行すると言われているようにこれ等の地方は古くからデング熱の故郷で、いつでもデング熱があり、外から新しくやって来た者はほとんど皆やられるわけだが、大流行はしよつ中あったわけではない。大流行には温度とか、湿度とかそのほかいろいろの条件が必要である。

デング熱をはつきりと一つの特異な病気だと考えて記載したのはバイロンで、一七七九年パタピヤで流行した時のことである。その後、現在まで世界各地の熱帯、亜熱帯地方に度々大流行をひき起こしているが、北緯三五度以北の流行はめづらしい。最近の流行で最も有名なのは昭和三年から四年、すなはち一九二七年から二八年にかけてのギリシャでの流行で、アテナイでは住民の八〇乃至九〇%が感染し、正式にとどけ出された患者だけでも、七七萬五千人余りで、社会的な活動は一時全くとまってしまった。しかし死者は〇・一五%で非常に少なく、しかも余病によって死んだ者ばかりであった。

日本では昭和六年の沖縄の流行が有名である。沖縄は明治二〇年の流行このかた、多少とも年々デング熱が流行する地方だが、この年の流行は特にひどく、約一二萬の患者が出ている。実際はもっと多かつたと推定されているが、すべての人が一時にやられたために電話もとまり、汽車も一部動かず、すべて社会的活動が一時はまったく停止してしまった。沖縄、小笠原以外の内地でもこれまで時々患者の発生はあったが、長崎の流行ほどのものはまだ一度もなく今年は尚そのほか神戸、大阪にも流行して、この方面に関する研究を大いに刺激したやうだ。

(筆者・本学医学部助教)
九大新聞 昭和十七年十二月八日